やあ、みんな。

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やあ、みんな。

【Ｎコード】
Ｎ４１１２Ｗ

【作者名】
新品の靴

【あらすじ】
この間僕らに起こった出来事を話そうと思うよ。

さいしょ。

やあみんな。久しぶり。
ネットを繋げるのは実に数カ月ぶりなんだ。
いろいろ込み入った事情があってね。

さて、その込み入った事情とやらを君達に話さなくてはいけないね。
そうじゃないと僕の小説を読んでくれている君達に失礼だからね。

こういうのってどこから話せばいいのかな。うん、まずは出会いからだと思うんだ。

「ねぇ、君さ、プログラムさわれる？」
僕は大学に登校する道の途中で、いきなりこんなことを聞かれたんだ。
もちろん、その人が真夏の炎天下に道路の端っこに座ってパソコンを睨んでたもんだから、どうしたのか気になって聞いたのが始まりと言えば始まりなんだけどさ、その人がまたすごいなりをしてたんだよ。黄緑色のぼさぼさの長い髪をしててさ、黒いゴーグルをかけてるんだよ。もうさ、けだるさが体に満ちた僕にとってさ、それって久々の人生の補給ポイントな気がしたんだよ。
「うーん・・・さわれるって言っても、ちょっと習っただけだから・・・」
正直に話しちゃったんだよね。これが。
でもそんなことはお構いなしに、ラップトップのパソコンをぐいと僕に向かって突き出してきくるんだよ。でも太陽の人のせいでディスプレイが見えないの何のって・・・。
「なら、ここに来て座れって」
いいなりになる。ここが人生の分岐点になったのかもしれないね。

あいつの隣に座った時から、僕らの運命は決まってたのかもしれないね。
懐かしいなぁ。確かあの時も外国人の匂いがしてた・・・。
あいつがプログラムで躓いてた理由は簡単なもんだった。#をつけて、ダブル↑↓シングルで万事ＯＫってわけ。見かけによらず機械オンチなのかもなんて思ったけれど、それはプログラムに限った話だったみたい。まぁ後で説明するけどさ。
「なぁお前、うちのマンションに来る？」
どうやら僕の腕前をお気に召してくれたらしい。あんなのちょっと触ったことある人なら誰だって分かるのに。
当然、僕は天才ハッカー様様の態度でいいよと答えた。

さいしょ。（後書き）

つづこうかどうしようか

マンション。

あいつのマンションはそれまた近くにあった。座ってた場所のすぐ奥、二階建てのマンションで、二階の方、右から二番目の部屋がそれだった。

うん、広かった。一人暮らしにしては、マンションってのもおかしいけど、この広さも贅沢すぎてた。明るい肌色の電灯が大きなテレビと真っ黒なテーブルを照らしてたのが印象に残ってるなあ。そのテーブルの上に基盤とか配線、ドライバー類がごちゃごちゃに置いてあったんだよ。まるで、

「どう、俺のアジト。」

にやりと笑うあいつはかっこいいんだよな。この時もかっこよかった。彼はどうやらアジトとやらに招き入れてくれたようだった。アジトにしてはこんなに簡単に人を入れていいものだろうかと思ったんだけど、僕の目はその机の上のごちゃごちゃに目を奪われてた。

「これ、なにを作ってるの？」

「これは遠隔操作できるようにしたやつ。」

何を遠隔操作できるようにしたのかを聞きたかったけど、なんだか僕にとってはあまりにもレベルが高そうなことをしてるんじゃないかと思って雰囲気にのまれちゃってさ、まぁ要するにびびったわけ。だからちょっとだけさ、このゴーグルをつけたやつが変な、というよりも不審な人間に思えてきちゃってさ、急に恐くなったわけ。

「お前にさ、プログラムの方を担当してもらいたいんだよ。」

わお。そう思ったね。仕事を任せられちゃったよ。出会ってまだちょっとしか経ってないのにさ。ほんと、現実でこんな加速度的に急に展開していくことってあるんだね。恐さなんてもう忘れたよ。言い忘れたけれど僕は１９歳。他社承認せずに他社承認の蜜が欲しい時期なんだよ。だからね、もう、脳ミソの回路が焼ききれちゃってさ、舞い上がっちゃったわけ。すごいやつになんだか認められた

ような気がしてさ。だからもう、ｏＫだよ。さっきまでの不安が逆位相でさ、えんどるふぃんノルアドレナリン全開だったわけだよ。ガキだよね。ほんと。こう書いてるいまもしみじみ思っちゃうよ。

「いいよ。僕がやるよ。他に仲間とかいるの？」

できあがっちゃってるでしょ。

「仲間は、いない。いままでは一人でやってきたんだけどさ、とうとうプログラムのほうで詰まっちゃってさー。」

どうやら僕が最初の仲間とやらであったようだ。いやあ、このときの僕ってさ、ほんと紙切れぐらいの強さだったからさ、また不安になったわけだよ。この人、僕の力を過信しすぎてる…ってね。力だよ。１９で力だよ。

「で、でもさ、僕ほんとにプログラムちょっと習った程度だからさ、全然力になれないと思うし…もっとすごい人いっぱいいるから…」

さっきはやるよとかね。言ったのにね。

「いや、お前だ。」

ゴーグルごしの目は見えなかったけどさ、整った顔立ちでさ、口をきゅっと結んで真正面に実際にこう言われるとね。メロメロになっちゃうんです。いや、その　気　はないけどね。ただあいつの唇は自慢できるくらい美しいんだよこれが。いや、その　気　はないんだけどね。

こうして、僕らは世界の片隅のマンションの一室で仲間となり、世界に歯向かってゆくのであったー。

マンション。（後書き）

つづこうか

休暇。

いやね、さっきは世界に歯向かった云々言っちゃったけどさ、実際は地味ーなもんだったわけ。確かにあいつのハードウェアに対する知識と技術はそれなりに凄かったよ。けどさ、所詮は一人で設計、作成できる程度のもんだったわけだよ。小細工をしかけたサッカーボールとかね。ふたを開ければもうちゃちなもんだったよ。

「これ、ここをこうしたいから、プログラム作って。」

でもさ、これがなかなか楽しかったんだよね。ふたりでハードとソフト分担して何かを作っていくってのが。真夜中にあのマンションの部屋でさ、薄明るい柔らかいライトが部屋を照らしててさ、すっごい静かな中さ、今日も疲れたな—なんて言いながら缶のファンタ飲むんだよ。いやぁ、やってることはしょぼいんだけど、なんだか、俺達って、すごいことやろうとしてるよな、みたいな中に入っちゃってさ。

プログラムもあいつの要求することにはたくさんの言語を使わなくちゃいけなかったから大変だったよ。いや、伝わりにくいと思うけどさ、めちゃくちゃ大変だったんだよ。あれほど勉強したことは人生でこれまでもなかったしこれからもなさそうだね。ほんと、先生が欲しかったよ。

ただね、二週間もするとね、さすがに…ね？僕もそこそこに力をつけてきたからさ、ちょっと余裕が生まれてきたわけ。人間とはそういうものだと思うから慣れとか飽きは仕方のないことだと思うんだ。プログラムの勉強はしてたけど、ちょっとずつ、あいつとの生活がぬるくなってきたんだよね。最初のころに期待したあいつに対するイメージが薄れて来たわけ。こいつ、変な格好してるけど、たいしたことしてねぇじゃんってさ。ただまあ、そんな中でもあいつ自身は常に自分の作るものに対して自信を持ってたし、奴が持つ過激な思想に相変わらず僕は虜だったんだけどね。

「なあ、なんかもっとすごいことやりたくね？」
あいつもそれに賛成した。やっぱりなんだかんだ。向こうも退屈になってきてたのかもしれないね。

僕らは探した。「すごいこと」をね。いやあ、俺達中学生みたいだよな、って何回言ったか。まあオモシロイものを一日中二人で探し出し合うのもなんだか楽しかったんだけどね。
そうこうしてるうちに僕は夏休みに入って、気づいたら両親が離婚してて、それは関係ないんだけどさ。ちょっとここで言いたかっただけ。なんせ僕が今回のことを話してるんだからね。あいつがこれを読んだらどんな顔をするだろうか…。まあ、想像はつくけどね。
そんなこんなで僕にはいろいろあったんだけど、向こうにもいろいろあったらしくてさ、僕が実家に帰ってた間なんとやつはＮＹに飛んでたんだよな。僕らの作った製品を会社に売り込んでたとか何とか。いやあ、嘘だと思ったね。どこまでそれを通すんだろうとも思ったけど、まあとにかく金が入ったらしくて僕らはその日から金に気をつける必要が無くなったんだ。
億単位で。
製品を売って得られた金かどうかはその時はわからなかったけど、実際にあいつはその程度の金を持ってた。
さあ、そこからだよ。オモシロイものをつくる選択肢が広がったわけだ。

休暇。（後書き）

他社承認…　つづく

兵器。

さてと、続きの話をしようか。
とうとう僕らは面白いことを考えた。何をするかはもう少しお預けだよ。そうじゃないとたのしくないからね。みんなも、ほんとに、たのしいことをやるべきだよ。そうじゃないと精神がイカレちゃうんだから。実際僕はそういうやつらを何人も見てきたし、いや、今だから言えるんだけど、僕自身もあいつに出会った頃はだいぶやばかったんだよ。まぁ、嫌なこともやらなきゃいけないんだけどさ、なにもそれで君の人生を埋める必要はないよっていうのを言いたいだけ。
話がそれちゃったね。ごめんね。それから、カリフォルニアのボブ兄さん（僕はそうよんでいる）に頼んで、Ｍ６１バルカンを買ったんだよ。これがまたすごいやつでさ、ぐるぐる回って撃つガトリング砲なんだよ。戦闘機とかに搭載されるやつ。反動が２ｔあったんだけど、その点に関してはあいつがいるから問題なかったねー。暇だったらｗｉｋｉでいいから調べてみてね。
それがあいつの家にでーんと会った時は叫んじゃったね。
「ハリウッド！ハリウッド！」
いや、ほんとに兵器が、日本の、マンションの中にあるんだからね。でーんって表現が最適だよ。そこからはもう、撮影会だよ。僕が撮ったり、あいつが撮ったり。普段は興奮しないあいつもちょっと息が荒かったな。
「さて、じゃああとは見取り図だな。」
「うん」
ひとしきり騒いだ後は、真剣なんだよ。僕達。お互い無言でね。まあ、そこが、楽しいんだけどね。
あいつがバルカンをいじってる間、僕は必死で本をあさってた。
「クラック大全」「セキュリティの破り方」「過去のクラック方法

まとめ」
いやあ、ほんっとに、くだらなかった。ネット上で胡散臭い本を片っ端からかき集めてみたんだけど、これがまた使えないのなんのって。だからね、本当に大切な情報を知るには、車のエンジンをキーなしでかける技じゃなくて、車そのものを組み立てるような技術が必要だと思ったんだ。
まあ、一言でいえばまた、勉強だよね。

兵器。（後書き）

今回みたいに更新が遅れることがあるかもしれないけど、待っててね

準備。

そこで僕はセキュリティ度の高いソフトウェアを構築しようと考えた。でも実装してもすぐに破られた。そんなサイトがあるんだよ。このセキュリティを破ってみろ、なんて言って置いておく場所がさ。実装して実装して実装しまくって破られて破られて破られたそんな時に、突然僕宛てにメールが来たんだ。

「ワタシノ弟子にナリナサイ」

みたいなね。いや英語でちょっと長かったから良く分からなかったんだけどだいたいはこんな内容だったんだ。その人はそのサイトで僕の作ったソフトを破ってる中の一人だったんだ。まぁ、シンプルに言えば、僕の努力を見てくれたんだね。

いやぁ、嬉しかった。まさかプログラミングの師匠ができるとは想像もしなかったよ。その日から僕は実装をやめて、彼女が出す課題をクリアする日々になった。課題っていうのは、毎回向こうが簡単なセキュリティのかかったソフトを実装してきて、それを僕が破るっていうものなんだけど、最初というか途中まではもう、さっぱりわからなかったね。いったい何をすれば破る事が出来るのかもわからなかったし、そもそものコードの理解だけでかなり時間を割かれたからね。でも、いや、あんまり言わないほうがいいんだけど、やっぱり、楽しいもんなんだよ。何かを突破するっていうのは。ゲームのｃｌｅａｒとは比べ物にならないくらい濃い達成感なんだよ。まあ、師匠が僕のレベルに合わせた丁度いいものを作ってくれたっていうのもあるんだけどさ。

それがどのくらい続いたかなぁ…たぶん三週間くらいだったと思うんだけど、急にメールがぱったりと止まったんだ。この時は僕もだいぶ最初と比べたら力をつけていたから、結構師匠といろんな話ができたんだけど、急に、本当に急に、不通になっちゃったんだ。いや、これはどう考えても、これが最後の試験だと思ったね。僕がこ

の師匠から送られていたメールの跡をたどって、居場所を割り出して、今度は僕が声をかける番なんだと。それで最後に師匠が「もう、教えることは何もない」とか言っちゃってさ。師匠と弟子の最後のお別れ、みたいなね。

でもまぁ、現実は違ったんだよね。いや、トレースの方法もしっかり師匠に教わってたから師匠の居場所を突きとめたことは突きとめたんだけどさ、いやぁ、調べてみると師匠、刑務所に入ってたんだ。ちょうど音信不通になった時に逮捕されちゃったみたいでさ。ちょっと、ショックだよね。あれだけ僕に「これはあくまで攻撃方法を知って防御を学ぶだけだから、攻撃側に回るな」みたいなこと言ってたのにね。師匠の威厳ゼロだよ。いや、まだ尊敬してるけどさ。

僕の想像したドラマチックな展開はどこにも展開されなかったね。こんな形で師匠との修行の日々はあっけなく、淡白に終わったんだ。まあ、唯一の救いと言えば、師匠がけっこう美人な人だったってことかな。まぁ、やり取りは電子メールだけだったけど。

僕がカタカタやってた間、あいつ、もう一台バルカン買いやがった。

準備。（後書き）

ひさしぶり。あいつも相変わらず。

警察。

警察が、来た。

あいつ、届いた興奮のあまり稼働させやがったんだよ。二台目のバルカン。もちろん弾は入ってなかったから良かったんだけど、突然砲身がぐるぐる回転しだしてさ、すっごい音なんだよ。びっくりしてあいつのほう見たら赤いスイッチ押したまま呆然としてるんだよあのバカ。

「早くそのボタンから手を放せよ！」

大声で叫んだんだけど、いまいち聞こえてないのかな。ずっと押しっぱ。しょうがないからコントローラーをひったくって、なんとか収まったんだけど。僕がなんか言っても、あいつずっと無言だった。そしたらさ、案の定ピーポーだよ。仮にマンションの入り口に仕掛けたセンサーが無かったって僕らのとこにくるってわかるよ。いやぁ、焦ったね。人生崩壊の危機を初めて感じたよ。僕はもうとんでもないところまで足を突っ込んでるのに、いまさら常識に気づいたんだ。

「警察が、このバルカン見たら、なんて言うだろうな」

「確かに、もう、いっそのこと、ばーんって見せて、模型かなんかって言っとく？」

「それかこれで迎え撃つか。前作った『玄関自動開閉マシン』仕掛けて開いたら俺達がこれに跨って…」

「いや、それよりもさ、警察を中に入れてから…」

だんだん、二人とも興奮してきちゃったんだよな。焦りよりも、楽しみのほうが勝ってきてたんだ。なんだか流れが澱んできたところに、久しぶりにでかい何かがきたんだよ。それに二人とも気づいてて、二人とも、なんて言うか、「一緒」っていう共有の感覚があっ

たんだ。それってすっごくあったかいもんなんだよ。この感覚はとても伝えにくいものなんだけど、とても懐かしい感覚。
そうこうしているうちに、ぴんぽーんと間の抜けた音が響いた。
沈黙。二人、目を合わせる。さっきのは、なしで。二人とも、こういうのはなんていうのかな。「ガチで」、やばいって思った。
ピンポーン
僕達は無言でベランダの窓を開け、バルカンをそっと二本重ねて置いた。いま思い出すととてもシュールな光景だったんだけど、さすがに僕らはビビりだしていてそんな余裕はなかった。ばれたら、この計画が全て終わりになるどころか、自分達の人生が危うい。
ピンポーン
二回目のチャイム。
「すいませーん。警察の者なんですが、ちょっとお話を窺えないでしょうかー？」
軽い口調を装っていても、その芯に響く声には硬い緊張が含まれていた。
「はい。」
僕が扉を開けた。顔を見られるけれど、もう、仕方ない。あいつは風貌が風貌だから、風呂場に隠しておいた。
「あのー、先ほどこのマンションに住む方から、この部屋から大きな音がしたという通報をいただきまして」
「あー、はい。」
僕らの間にはなんの策も考えていなかった。僕らは、本当に、馬鹿だった。後悔が、おしよせてきていた。
「できれば、部屋の中を見せていただいても大丈夫ですかね？」
二人の警官の内、一人の、少し腹の出たおっさんがじっと僕を見つめてそう言った。部屋には、火薬、基盤、配線、工具類、計測機器などがテーブルに山と積まれている。
「いや、あのぉ、ちょっといま散らかってて…さっきの音はテレビが倒れちゃった音で…ご迷惑をおかけしてすいません」

なんとか、これで切り上げたかった。
「そうですかー。でも、一応我々も仕事で来たので、少しだけ、部屋の中を見せてもらっても構わないですかね？」
もう一人の若い警察官が、不審な目で僕を。
僕はビビりだった。弱かった。プログラムで力をつけて調子に乗っていただけの、ただの子供だった。「任意を断ると公務執行妨害でやられる」という知人の言葉がいまさらになって響いてきた。
僕が黙っていると、「いいですね？」と言いながら割って部屋に入ってきた。
侵入。ぼくらのアジトに、警官が。
全てが崩れていく音がした。もう、ぼくはみっともないほどに震えていた。涙目になっていたし、いろんなことが頭をよぎった。離婚した両親のこと、その彼らの両親のこと、自分の人生。大学のこと。友達。今後の未来。
未来。
ゆっくりとした足取りでリビングに向かうと、二人の警官が無言でテーブルを見つめていた。
「君は、なにをしていたんだ」
後ろから、ドアがバタンと締まる音が聞こえた。ああ、やられたなって、二人の警官に見つめられながら、呆然と思った。

ながれ。

ぼうっとなった僕はもう全てを話すしかないなー、なんてぼんやりと考えていた。
「ええっと、実は…実は…」
もう、恥ずかしいけど、半分泣きながらだったんだよね。本当に、この時、本当に怖さを感じたよ。ごめんなさいって気持ちが溢れだすんだ。
ゆっくりとテーブルの上に置かれたものを見つめて、全てを白状しようとした、んだ。
けれどテーブルの上には僕のノートパソコンがばらばらになっていた。
「実は…、実は…僕、あの、自分のパソコンを、解体して遊んでたんです…」
言いながら自分の頭の中でこの状況が再構成されるのを認識していた。
「この機器はどこから買ったの？」
若い警官がオシロスコープを指して聞く。さっきとは、雰囲気が、ガラリと変わっていた。
「ネットで、買いました。でも、こういうことって、いけないんですよね」
すいません。と言って深く謝る。ここでこうしておけば、全てがこの雰囲気で終わる。
「いやいやいや違法じゃないから大丈夫だよ。それにしてもよくここまでバラバラにしたなあ」
おっさんが感心の目を僕に向ける。感心の目だ。流れの逆転に思わず笑いそうになるけど、ぐっとこらえた。
「あ、そうなんですか！？てっきり僕はやっちゃいけないことなのかと…いやあ実はさっきの物音も電動ドライバー動かした音でして

…次からは外でやります…」
緊張がほぐれたかのようにふるまう。たかがノートパソコンの分解に電動ドライバなんて必要なはずもなかったけど、テーブルの上に置いてあるってことはつまりそういうことなんだろう。
「そうだな。テレビ傷一つないもんな」
おっさんが笑って答える。なぜかわからないけど、警察ってすごいなって思った。すごい安心します。
だけどおっさんは、ふーんと言いながら、部屋をみわたして、くるりと向きを変えて、ベランダに、向かって、歩いて、ソファを回って、そのカーテンを開けたら、
ぱぁん
乾いた発砲音が、リビングに響いた。僕の知る限り、それは警察の銃の発砲音だった。
ぱぁん、ぱぁん、ぱぁん
それは何発も放たれた。ものすごくクリアな音質で。
テレビの側の目ざまし時計は一分間に渡って必死に発砲音を発砲し続けた。
「おいおいおいおい。目ざましを発砲音にしてるのかい」
「うーん…。まぁ、そうですね。こういうの好きなんです。これも自分で改造して作ったんです」
警官達の死角となるもう一方の窓からあいつがにやっと笑いながらこっちを見てやがる。それもそうなんだよ。この目ざましは初期のころ僕達が遊びで作ったやつで、広義のリモコンで操作できるようにもしてあったんだ。それをあいつがおそらく風呂場から玄関、外の廊下へ飛び出し窓に移って中の様子を見て、ぴっと、ってわけだろう。
ふぅ
おっさんが、ためいきをついた。全てが、終わった。
「じゃあ、こんな夜中に電動ドリルは使わないように。近所の人達に迷惑になるからね。今度は外でやりなさい」

「電動ドリルじゃなくて電動ドライバーですね。わかりました。すいませんでした。これからは注意してやります。」

「じゃあ、がんばってな。発明家くん」
若い警官が最後に笑いながら去っていった。

にやつきながら、あいつが玄関から入ってきた。
僕はあいつがリビングに入ってくるのを待って、一発、おもいきり殴った。あたりまえだろう。わざと下側からこするように殴ったから、あいつの真っ黒なゴーグルが上に跳ね跳んだ。
「お前、どんだけ危なかったか、わかってんのか」
あいつには知られたくないんだけど、僕、ほんとけんかとかしたことなくって、誰かを殴ったこともなくて、ぶっちゃけどう怒りを表現したらいいかわかんなかったんだよね。なさけないんだけどさ。
「お前、もうちょっとで、全部、全部、パーになるところだったんだぞ」
あいつは吹きどんだゴーグルをしゃがんで拾いながら、「いーじゃねーかよ。なんとかなったんだしさぁ」
すごい暴力。ふぁーって体中に満ち溢れてくるんだよな。このまま走っていってもう一回思いっきり蹴飛ばしてあいつの体が窓を突き破って…
「ただまぁ、ただまぁ、あれだよな。お前、よくやったよ。テーブルは」
この言い方はちょっと立場が上になって調子に乗りだしだしたんだよね。でも実際、テーブルに僕のパソコンがバラバラになってた時は、ちょっと、気づくまでに時間がかかったな。
「お前、あれだろ。僕が警察と話してる間リビングに戻って火薬を隠して、あの間に僕のパソコンを分解したんだろ」
「俺がパソコンを解体する様はまるで踊っているようだって言われたことあるんだぜ」

「どうでもいいよそんなの。お前、あの時どんだけ危なかったと思ってるんだよ。なあ？あれに気づかなかったら、いまごろ…」
笑ったおっさんと若い警官が、僕達を。
あいつさ、お前って呼ばれるのすっごい嫌いなんだよ。
「あーあーそうだねえ。危なかったよねえ。お前が警官目の前にしてびびって泣きそうだったからさ、気づく前に全部ゲロっちゃうのかと思ってひやひやしたよ」
もう一発殴って、殴り返されて、取っ組み合いになって、だんだん、けんかというものが分かってきたんだね。ほんとに、あれって、めちゃくちゃおもしろいよね。途中からもう、お互いわかってるんだから。もうやめてもいいっていうのが。でも殴り続けて殴り返されての繰り返しでまるで二人で「けんか」っていうものを「やってる」って感覚になってくるんだよね。こう、セックスみたいにさ。いや、何回も言うけど、その気はないよ？僕は。いやあいつもね。
ではぁはぁ言いながらリビングに横たわって寝た。
次の朝僕らはインターホンの音で目が覚めた。
ぴんぽんぴんぽんピンポンピンポンぴんぽんピンポンピンポンピンポンピンポーン

ながれ。（後書き）

更新が遅くなってごめんね。待っててね。

仲間

ものすごく不快な寝起きだった。昨日は感情の起伏が激しすぎて心もくたくただったし、殴った痕も殴られた痕も痛かったし、しかもかたい床の上でそのまま寝ちゃったから、僕らはものすごく機嫌が悪かった。

「お前が出ろよ」

「はぁ？お前が出ろよ」

「警察だったらどうするんだよ」

「こんなインターホン鳴らす警官いるかよ」

そう言って僕らは笑いあった。確かに、ガキの頃したような押し方だった。

「警察じゃないならお前が出ろよ」

「無理」

一発軽く殴って、いやいや僕が出る羽目になった。玄関に向かう間も絶えず、文字通り絶えずインターホンが鳴っていた。

「はーい・・」

目をこすりながら扉を開けると、目をこっちにむけてガキが立っていた。

がしゃ

「誰だった？」

「知らないガキ」

ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴ・・

「何？何か用ですか」

そのガキは小学5、6年のちょっとぽっちゃりした細いメガネをかけた少年だった。

「ねぇ、僕見たよ」

「なにが」

「がとりんぐマシンガン」
ああ。今でもこれを行った時の、あいつの顔がまざまざと、まざまざと思い出すよ。勝ちほこった顔。ホントに。憎たらしいって言葉がぴったりだった。頬をおもいっきりつねってぐにゅぐにゅしたかったな。まぁそれは後で実現できたんだけどさ。この時が一番したかった。
だけど、もう、僕は僕で黙っちゃったんだよね。「しまった」って顔をさらけ出しちゃった。
「ねぇ、見せてよ。じゃないと警察呼ぶよ」
たった一回の騒音で警察まで呼ぶような近所の誰か。それは、もしかして、
「お前、昨日の警察はお前の親が」
「いや、あれは違う別の人だよ。ここの隣のどっちかじゃない？僕は下の階に住んでるから」
下の階？ならどうしてベランダにあるバルカンが見えるんだって思わず聞こうと思ったけど、墓穴を掘るようなまねはしなかった。
「がとりんぐマシンガンなんか持ってません。じゃあね」がしゃ……
ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴ・・
「なに？まだ用？」
「僕見たんだよ。昨日の夜、サイレンがちょうど聞こえてきた時、ここの部屋のベランダで二人が重そうな長い筒みたいなのを二つ、重ねて置いてるの」
まさか、まさかまさかあの時に、目撃者がいたとは…。僕らの計画がこんなガキ一人に…。
「そのあとに警察がここにも来たし、てっきり僕は二人が捕まるものなんだって思ってずっと見てたんだけど、どうしてかあの二人の警官は笑いながら帰って行ったんだよね。たぶんベランダに置いた何かがばれなかったんだろうって僕思ってさ。でもあなたたちはほんと馬鹿だよね。なんで今もベランダにあれが置いてあるの？昨日

の晩に片づければ良かったのに。まさか忘れてたなんて馬鹿なこと言わないよね？それってすごく馬鹿なことだから」
興奮してるのか最後のほうは馬鹿としか聞こえなかったけど、まあ、確かに事の顛末はそういうことだった。悔しいけどこの少年が言うとおり僕ら完全に油断してベランダから部屋に引き揚げるのを完璧に忘れてたんだ。つまりまあ、今もベランダにあるってこと。
しかもそれが致命的なミスとなった。昨日の晩に引っ込めておけば、この少年が暗闇に見た長い筒をバルカンだとは気付かなかったはず。だけどまあまだ防ぐ手段はいくらでもあった。でも、こいつ、必死だったんだよね。ほんとに。それじゃあさっさと警察に言いなよって言いたかったんだけど、わざわざここへ来たこの少年の決意はそれじゃあないんだろう。
「で、僕らにどうしろと？」
「うん。仲間に入れて欲しい」
「いいよ」

仲間（後書き）

いつもみんな読んでくれてありがとう。もちろんまだまだつづくよ。

ガキ

「いいよ」
そう言った後、そのガキも僕らの仲間に加わって、一通り自己紹介が終わって、バルカンも部屋の中に片づけて、まあ、バルカンを間近で見た時もさすがに本物だとは思ってなかったみたいだけど、それで、一通り落ち着いた時に、ガキはトイレに行くと言いだした。
「トイレ、行ってもいい？」
「別に行きたきゃ行けばいいよ。もうお前ん家でもあるし。好きなようにしなよ」
わかった。と言ってすたすたトイレに向かう。
がちゃ
「なあ、あいつは、巻き込まないようにしような」
じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼ
「ああ、わかってるよそんぐらい」
ぼぼぼぼぼぼぼぼ
「でも、僕が許可したはしたんだけど、お前はいいの？」
ぼぼぼぼぼぼぼ
「ああ。いいよ。まあ入れるに足る何かがあったんだろう、しな」
ぼぼぼぼぼ
「お前も、僕の事がよくわかってきたじゃないか」
「しね」
ぼぼぼぼ
「にしてもあいつ、出すなあ…」
がしゃ
じゃあああ
「ちょっと、これ、あれ、ドアが、開かない」
「あーごめん、そのトイレ、壊れまくってるんだわ」

悪い悪い…といいながらトイレに向かうあいつ。
まったく、どうしてここのトイレはあんなに壊れてるんだろうか…
直す気もないみたいだし…
でもあいつがガキにトイレの使い方を教えてるところを見ながら、なんだかあいつは優しいなあなんて僕は思ったりした。
「さて、トイレの事件も無事片付いた所で…」
カーテンは全部開けた。トイレにも、行った。ソファーにもちゃんと座った。飲み物も飲んだ。バルカンも部屋の中。
僕らは万全の状況で、ぶらり途中任務の旅に出ようとしていた。
「昨日、」
あいつの黒いゴーグルが、ひかった。
「警官に、通報した奴だ」
ごくり。僕たちは息をのむ。
「復讐だああああああああああああああ」
「うおおおおおおお」
「うおおおおおおお」
「……」
「ん？なんだガキ？何か重要な見落としが・・！？」
「いや、ガキのすることでしょ。」
このときがガキが一番ガキじゃなかったね。

朝、朝食

「よーしみんなァ、さっそく任務に取り掛かっちゃうゾ！」
「ちょっと待って。もうそろそろ戻らなきゃ。朝ごはん食べて学校に行く時間だよ」
この日は平日の木曜日。ガキが学校に行くのは当然のことだった。
時計を見ると7時ちょうどあたり。
「まったく…しょうがないなぁ」
「休め。」
「いや、休んじゃだめでしょ」
「まったく、お前ってやつは…くそつまんねぇほど真面目だな」
「お前な、今日休んだからって、これからどうすんだよ？ずっと休ませんのかよ？」
「なら行けい。」
だからもう行くっていってるでしょとか言いながら、まだソファーに座ってもじもじしてやがんだよな。
「早く行けよ」
そう急かしてやっと腰を上げる。
もちろん見送りは僕だ。
「だいたい、何時ごろここに来れる？」
「んー…朝は今日みたいに早く起きれるかわからないけど、夜は塾が終わって帰るのが１１時くらいだから、そこから３０分くらいなら大丈夫だと思う。土日もたぶん…大丈夫」
「塾そんなに遅くまで行ってるの？」
「え？うん」
「嫌じゃないの？」
「嫌だけど…まあ、今年受験だしね」
「受験するんだー…。まぁ、六年だからそうか…その時期だもんね…」

「うん。じゃあまた今晩ね！」
「はーい」
ドアを閉めようとするとあ、ちょっと待って、って言って入れてくれてありがとうなんか言いやがって。
まったく…白い世界。
「あれ、今日のニュースの人違う人だ」
いつも通りに僕らは朝食をとる。ベーコンさいこう。そう思った朝でした。

朝、朝食（後書き）

ゆっくり進むかもしれない

作戦かいぎ。

「よし、これで全員そろったな」
夜の１１時。ガキが塾から帰ってきてすぐに、作戦会議は開かれた。
「あ、そういえば、合い鍵作っといたぞ」
真鍮に光るマンションの鍵がテーブルの上に置かれる。
「ん、ありがと。」
僕の隣に座ってたガキの体は、少し震えているようだった。でもその気持ちが、僕にはとてもよくわかったし、正直羨ましいとすら思ったよ。
「で、だ。まずは情報がもっと必要だ。今回の件で、我がアジトの周辺のことをもっとよく知る必要があると分かった。そして対策を立て、この砦をより強固なものにする」
ふむ。まあいい考えかもしれない。狭い世界で黙々と作業を進めるのも一手だけど、これからのことも考えるとご近所さん相手に実戦経験として訓練しておいた方がはるかに成功する確率があがる…かもしれないしね。まぁ、そのへんはとってつけた理屈であって、単にちょっといろいろやってみたかったっていうのが一番だったんだけどね。しかもそれが三人の原動力になってたから、まぁ、言い訳だね。
「まずは誰が通報したのかを突きとめなくちゃいけないな」
「そう。ならまずはどの範囲まであの音が聞こえたかで対象を絞る必要がある」
「下の階だとあの騒音は聞こえた？」
「聞こえなかったらしいよ」
「聞こえなかった？」
「うん。二人とも。」
「お前一人っ子だったの？」
「え、うん。」

ガキが帰って寝るまでの少しの間、あいつ、どう見ても一人っ子って感じだよな、みたいな話をした。あの夜は楽しくてよくわからないけど嬉しくてちゃんと記憶に刻まれてるんだ。
「しかし…聞こえなかったのか…」
「ここのマンションの壁、結構厚いからね。隣の人の音とか、全然聞こえないでしょ？」
そう、昨日はだいぶ焦っていたし、実際に警察も呼ばれたからかなり動揺したけれど、この壁の厚いマンションだと音は隣の部屋でさえある程度は音が小さくなっていた。つまり、
「実際は、警察を呼ぶほどの音ではなかったと」
僕らも違和感は抱いていた。音が大きかったにしろ、たった一回で通報までされるなんて。普段がうるさいならまだしも、僕らはこの期間お互い作業に没頭してたんだから。
「なら、だいぶ絞れるな。おそらく、このどっちかの隣の部屋の奴だろう。しかもそいつは、かなり、神経質な奴だ。」
か、そういう時期だったのか。
「そこで、だ。俺に一つ案がある。神経質テストだ。」
そう言ってリュックからごそごそと何かのシールを取りだした。黄色いスマイルマークがたくさん並んでいる。
「ガキを使う。この両隣の部屋に行ってピンポンしろ。一回で、いい。それで、出てきたら、『こんにちは』って言いながら、扉を開けている相手の腕にこのシールを張り付けろ。」
「…ばれないように？」
「いや、思いっきりばれていい。ばれるくらいわざとらしく大胆にピッて貼れ。」
「はぁ？それでどうなんの？」
「キレるんだよ」
あいつはドヤ顔を作りながらソファーにふんぞり返った。
どうしたらいいかわからなかった。もっと、普通にいってもいいんじゃないかと思ったけど、あまりの自信ありげな態度に、逆に僕ら

は黙らざるを得なかった。
「へ…へぇ、でも、僕やりたくないんだけど」
精一杯の抵抗を示したけれど新人にはそんな権力は持ち得ない。
「やれ」
不敵の笑みを浮かべたままあいつはそう宣言した。
「両方ともキレたらどうすんの？」
「それはない。」
「根拠は」
「ない。」
この日はやたらと機嫌が良かった。普段は結構無口で常に何かを考えてるんだけどな。あいつは。
ガキっていうのは、本人が何もしなくっても居るだけでいいものなのかも知れないね。
「実行はガキが休みの土曜日だ。今日はこれで解散。もう疲れたから寝る。」

ドア。

決行の朝、土曜日。時間は、確か１０時半。
「土曜日は塾じゃないの？」
「塾だよ」
「え、なら行かなくていいの？」
「行ったことになってる」
「…へぇ、そう」
「まぁ、いつかはばれると思うけど、そうなっても何とかなるでしょ」
「これが親にばれたら、大変じゃない？」
小学４年から毎日塾に通わされたガキの家庭環境については少しだけ想像がついたし、話にも聞いていた。
「その時は、そのとき」
じゃああ
「しっかし、うちのトイレはどうしてこうも流れる時間が長いかね」
洗った手を自分の服で拭きながら言う。
「さて、それじゃ、ガキ。準備はできてるか？」
「準備もなにも、ただシール貼るだけじゃん」
そして相手がそれにキレたらクロ。キレなかったらシロ。
なんだかなあ。
「では、行って参ります」
「おう。頼んだぞ」
「まぁ、いざとなったら僕らが出ていくから…」
がしゃ
「よし、球根開始」
球根とはあいつが発明した盗聴器の事で、お医者さんがよく首に下げてる聴診器から取り出した音をさらにデジタルで波長を増幅させ

る仕組みだ。それならこのマンションのドアの内側に張り付けるだけで音がちゃんと拾える。ちなみにノイズを消してよりクリアに聞こえるように改造したのは僕だからね。なぜか球根って呼ばれてるけど。
せめて吸根にしてあげたらいいのに。
まずは向かって右の人にアタックだ。
「ピンポーン」
…シーン。
「いないんじゃない？」
「土曜の午前だろ。いるに決まってるよ」
がしゃ
「はい。」
出た。女性だ。
「こんにちは」
それを合図に貼るようにしてあった。
「うん…？かわいいシールだね」
「シロ。」
「シロだね」
「ならこっち側の奴だな。」
「そう上手くいくかなぁ…」
そう言いあってるうちにガキはなんとか話をまとめて終わっていた。
次、こっち行くね。覗き穴からあいつが指で示しているのを確認する。まぁ、あいつの説が正しければ、消去法的に次がクロになるわけだから、緊張するのも当然と言えば当然なんだけど、ちょっとお前、顔の汗多すぎだぞ。
「ピンポーン」
…しーん。
「すいませーん」
ガキがアドリブを利かせる。自分が取るに足らない単なるガキだということの必死の証明だ。

しーん。
1秒、2秒、3秒、4、5…
だめか。
がしゃ
「なんでしょう」
あいつの顔が上がる。おっさんの声。まとわりつくような、粘っこい声。
「こんにちは」
過ぎゆく一瞬の間。
「何なのかな、これ」
「いや、すいません。実は、これ学校の」
「君ここに住んでるんだよね。何号室？」
「いや、ほんとにすいま」
「何号室？親と話がしたいんだけど」
「逃げろ。」
無線で指示が飛ぶ。
「おい。待て。おまえ、」
キーーーーーーーーーーーーーーーーン
男が急に高い声で叫び狂ったんだ。拡大された波長は球根をあっけなく破壊した。
隣の部屋のドアが閉まる音だけが聞こえた。追いかけたのか。部屋に戻ったのか。
予想を超えた反応に次にどうするかが全く思い浮かべられずに固まっていると、ぶるると僕の携帯が震えた。
「はぁ…はぁ…いやぁ、びっくりした」
「大丈夫？」
「うん。あいつが通報したんだね…あいつ、頭がおかしいよ」
時間を開けて、もう一度三人で集まった。
「どうするか、だな」
あれは、尋常じゃなかった。

「とりあえず、あいつの行動パターンの把握。盗聴。それであいつがいない時に部屋を探索する。」
え…
「探索って？」
「あいつの部屋がどんなのか気になる。」
「いやいや、そこじゃねぇよ。どうやって探索なんてするんだよ。ピッキングの技術でも持ってんの？」
「いや、ここの鍵だと無理だ。というよりも、探しに行くのは何も俺達じゃなくてもいい。」
「あー…」
作るんですか。
「そういうこと」

サソリ君。

ここで僕たちがどんな機器を使ってそれをどういう風に利用したかを説明するのはつまらないから省くけど、とりあえず二、三日で盗聴も行動パターンも記録することができるようになった。盗聴はあいつが。何時に出て何時に帰ってくるのかのデータはガキの携帯に送るようにした。僕はなにもせずに計画の方を進めることにした。ちなみにガキにはこの計画については何も言ってない。ここでどんな活動をしてるのというガキのシンプルな問いに対して「世界に歯向かっているのさ」というシンプルで幼稚な答えをあいつは返した。隣のおっさんは、どうやら朝の7時半に出勤。夜の9時から9時半には自宅に帰ってくるという規則正しい生活を送っているみたいだった。ごみもちゃんと分別して出す。ごみ袋の中身も菓子や酒の類はなく、これといって変わったものも捨てられていなかった。女もなし。盗聴結果は微妙の一言。帰ってからテレビをつけ適当な番組を見て、電気を消して寝る。ただ毎週の土曜日の朝１０時にはかならずどこからか電話がかかってきて、そのちょうど3時間後にどこかへと電話をかけているくらいだった。ただ風呂場に行って電話するらしく、内容までは聞き取れなかったらしい。

くそつまらねぇ。

まぁ、怪しいっちゃあ、怪しいんだけど。

「くそつまらねぇ。」

二週間過ぎた火曜日の夜。あいつは僕と同じことを言った。

「どうすんの？」

僕は既に現実を見始めてた。理想の「敵」は存在せず。ただ単に隣に住む人がちょっと変な人だったっていう、単なるそれだけの話。僕の中にはよくわからない疲れみたいなのが体にたまりはじめていたんだ。肝心な僕らの計画もほとんど進まなくなってきた上に、そのゴールへ向かう向上心すらも霧のようなしっかりとつかめないも

のへと変わっていた。
「もう、そろそろだな。奴の家を探索するか。」
これに賭けるしかなかった。これで普通の部屋だったら…。でもその可能性が一番高いと思った。あいつはどう思ってるのか分からなかったけれど、少なくとも僕とガキはもう、このまま行っても…っていう思いが満ち溢れていた。
僕らの考えた探索とは至ってシンプルなものだった。とにかくコントロールできる視力さえあればいい。
「と、いうことで、サソリ君の登場だ。」
サソリ君は機械のサソリくんで。頭にカメラ。しかも超すごいやつ載せたんだ。金はあるからね。で、脚が8本あるんだけど、これが一本一本コントロールできるようにしたんだよな。馬鹿だよ。あいつ。普通はパソコンの中でモデルを作って一番効率よく歩ける形をパソコンが弾き出してその結果を実物で実際に動かしてみるわけんだけど、あいつ、一本一本をコントロールできるようにしたんだ。動く際にハサミの部分は動かさなくていいとして、残りの6本を、僕達三人がPS3のコントローラーで協力してそれぞれの脚を動かして歩けるように操作しなくちゃいけない。二週間の間、どれだけ…練習したか。ちなみにPS3のやつにしたのはそっちのほうがゲーム性があって習得率があがるからだそう。
「土日はあいつずっと家にこもってるから、平日にしようと思う。と、いうわけでだ。ガキ、学校をズル休みしろ。」
「えー」
「まぁ、一日ならしょうがない」

そして木曜日。実行の日だ。そんな日はあっという間に来る。そんな日はあっという間にすぎる。
「どう、人生で初めてのズル休みは」
「別に」
とかいってばれるかどうか不安なんだろ？汗が顔中に噴き出てるぜ。

がしゃ
朝の7時半ちょっきし。
サソリ君がおっさんの部屋に忍びこめるのはこの瞬間しかなかった。しかし頑張っても僕らがコントロールしてその刹那の間にサソリ君を忍びこませるのはまだリスクが高すぎた。直前まで練習したんだけどね。ひとり操作が下手なやつがいてさ。ため、初回起動時に限って発射台を設けることにした。
おっさんが扉をあけたそのすぐ右に、堂々と発射台がおいてある。隠すこともできないしね。
「えぇ！？ばれるんじゃないの？」
「大丈夫だ。」
ガキと頷き合う。嫌な予感がした。
「あんな生活してたらな、絶対に性欲がたまんだよ。だから扉開けて正面すぐ左にグラビアのポスター貼っとけばいい。くぎ付けになるはずだ。そしたら絶対こっちは見ない。」
この案を聞いた時から、僕とガキはまたも反論する余地なく、しょうがなく納得するしかなかった。あいつは本体を作る前にすでに発射台を作ってたんだ。
「な？お前ら。な？みろよこの発射台。ちょーかっこいいだろ？な？」
たぶん、発射台というものを作りたかっただけなんだと思う。
一枚目のディスプレイごしに、陸上競技でスタート時に足を乗せる器具のようなものが映っており、その上にアルミで光るサソリ君がいた。二枚目にはサソリ君の頭に載せたカメラの映像が、そして三枚目には、でかでかと貼られたグラビアのポスターにくぎ付けになっているおっさんが映し出されていた。
「おっさん…」
しかしこの瞬間が大事だ。行け。
目で互いに合図し、あいつがボタンを押す。
ばん

仕掛けられたバネが陸上競技でスタート時に足を乗せる器具のようなものそれ自体を高速で前に押しだし、その連動でサソリ君が直線に飛ぶ。さぁ開始だ。

へや。

そこからはスローモーションのような世界だった。
サソリ君が飛び、二枚目のディスプレイの映像が揺らぐ。そして三枚目に映ったおっさんの顔が、ゆっくりと右にねじまげられ。
視線が、発射台へと注がれる。
終わった。すべてが。今回発射の音は最大の危機ポイントだった。だいぶ改良したんだけど、それでもまだ音が少しした。最後に神頼みだったんだけど、その頼みはあっけなく無視された。あたりまえだともおもうけど。また警察か。あの二人が今度は違う顔で僕に逢いに来るのか。
ということはなく、いや見たことは見たんだけど、ただ「見た」だけだった。それだけ。何事もなくグラビアのポスターの方を振り返って、ガキに対して行った同様の怒りの表現方法をしてそのポスターを破りさいた。
あいつは、興味深そうに、俺とガキが浮かべる恐れや不安の表情とは全く別物の、言ってみればバルカンを買った時のような顔でそのおっさんの行動を見つめていた。
そして静かに欠けているなと呟いた。
僕は知っての通りビビりなのでおっさんに僕らのやろうとしていることがばれなかったただそれだけですごくホッとしていた。いや、僕だけでなく、ガキも同じ感じだ。いや、だってね、おっさんがガキに対してとった態度、あれは尋常じゃなかったよ。あの一件以来、別に普通を装っていたけれど、内心本気で恐がってたんだよね。ほんとに、もし狙われたら、何をされるか…。
どうしてかサソリ君を部屋に入れる事が成功してしまった興奮でアドレナリンが大量に出始めた。入っちゃったよ。それしか頭になかったし、たぶんそれしか言ってなかったと思う。
だけど本番はここからだった。

おっさんが下へ降りるのを確認して静かに発射台を回収した後、ディスプレイに向き直る。
ＰＳ３のコントローラーを握りしめ、これ以上ない真剣な表情で画面をみつめる三人。
どんなゲームしようとしてるんだよ・・・
「よし。行くぞ。」
おーというかけ声で、いっちに、いっちに、と地味にそれぞれがボタンを押して脚をうごかしていく。それに連動して、カメラが映す映像がわずかに揺れる。
そう、地味。ホントに地味な作業だった。ほんのちょっとしか進まない。長い廊下を歩き終えるのに、一体何分かかったことか。
やあっと廊下を抜けてリビングに出ると、白い世界が広がっていた。
「うわっ」
ホテルの一室かと思う部屋だった。生活臭なし。ここも綺麗なんだけど、それとは違った、なんていうか、ただ宿泊するだけの部屋というか、それだけシンプルなものだった。テレビ、机、ベッド。それだけ。床はほこり一つなく、カーテンレースを通した白い光だけを反射していた。壁も張り替えたばかりのような白さ。白い部屋に白い光が差し込んで反射して、夢の中にいるような光景が広がっていた。
つまり、何も、なかった。
ガキの肩から落胆がにじみ出ていた。たぶん僕の肩からも滲み出てたと思う。
「とりあえず登ってみるか。」
部屋全体を見回すには高いとこから見るのが一番いい。ということで、サソリ君の尖った脚を白い壁に刺し込んで、一歩また一歩と高度を上げていく。
これまた高度な技術が必要だった。ただ前に脚を出すんじゃなくて、刺さった脚を抜いて、前に出して、また深く刺し込まなくちゃいけない。僕とあいつはそこそこだったんだけど。

「あ…」
ガキだよな。問題は。あいつは、もう、センスがない。あいつのせいで何回落ちたか。起き上がるのも大変なのに。
よくエベレスト登頂とかで雪山に足を埋めながら一歩一歩進んでいく映像を見るけれど、あの気持ちがひしひしと分かったね。失礼だけどさ。
2メートルほどかな。やっとそこまで登りついた。これには、何時間も、かかった。ガキも、泣きそうだった。
ディスプレイからは部屋全体が見渡せた。なにも飾られていない真っ白な壁の下に、さっき映像に映ったものそれだけが見えていた。
つまんねぇ部屋だ。
「撤収ですね」
おっさんの弱みを握れることもなく。
むしろ清々しいくらい清潔なへやをこれでもかと見せつけられて、逆に感心すら覚えていたところにうーんと言ってあいつが何らかのボタンを押して画面の色が変わった途端壁中に大量の文字が。

へや。（後書き）

つづきます。

記号類

僕とあいつはそれが読めなかった。だけどガキにはそれが読むものであるということすらわからなかった。
それはある特定の企業が使うオリジナルの言語だった。
僕らはその特定の企業に非常に興味を持っていたし、僅かながらの情報はあった。だから僕とあいつはそれが「言語」であることがわかった。
だけどガキには見たことのない形の記号類が言語だとはさっぱり分からなくて当然だった。
僕とあいつは正直に戸惑った。どうして、僕らの計画の核となるこの記号類が、となりのおっさんの壁紙に、しかもブラックライトに照らされて浮き出てくるのだろうか。
あのおっさんは、一体なにものなのか？
「なんだっこれ？」
ガキはただただ不思議そうに言う。
だけど僕とあいつはそれ以上の衝撃を受けていた。
僕らの計画の一部は、これらの記号類の奪取と解析だった。
「なんだ・・・どうしてだ・・・。」
あいつは、あいつも、久々に戸惑ってた。
僕は、ただ、それよりも、怖かった。
ただただ、怖くなった。真っ白な壁一面に殴り書きのようにしかし緻密で正確な文法に従って適切な大きさでびっちりと書かれて、いや描かれていたものに対して、僕は狂気を感じた。やっぱりあのおっさんは、正常じゃない。

ことの発端は、僕がまだ師匠からいろいろ教わっていた時だ。
僕はネットの海をいかに上手く航海できるか、またいかにしてその

深遠まで覗き得るかということについて学んでいた。
「じゃあ、少し時間をあげるから、少しいろいろ調べてみなさい」
師匠はそう言って一枚のＵＲＬを僕に渡した。
そのＵＲＬをスタート地点として、僕は探りを入れていった。いろいろな事を調べ、深くまで潜り、もしくは引き出し、様々な情報を集めた。
与えられた時間はほんの僅かだった。まだまだ未熟な僕にとって、それは本当に、真実に辿りつくにはあまりにも短すぎる時間だった。だけど僕は収集した一連の情報から、とある企業とその企業が生み出した独自の言語についての手掛かりを得る事が出来た。
その情報は、練習の材料にするには、あまりにも深く、巨大で、重いものだった。
だけど、このときの僕は、それを知る由もなかった。単なる、ほんとに練習程度の軽い情報の断片。ちょっと変わった企業だなあってな位でさ。企業がその内部のみで使うように開発された独自の言語なんて興味をそそられるものだったから、まぁ確かに師匠が選びそうな練習材料だな、なんて思ったりもしてさ。
ただまぁ、いろいろ教わった事を元にさ、そのことについてさらにいろいろ調べてみたんだ。興味深かったしね。
だけどそれが、なにもでないんだよ。ほんとに。なんにも出ない。ゼロ。検索結果、ゼロ。これはどう考えても、おかしい。果てしない異常事態がその検索結果に現れていた。その事に、僕は気づいた。誰だって気づくと思うかもしれないけれど、おかしいことにおかしいってちゃんと気づくのは、案外難しいもんなんだよ。
師匠が渡してくれたＵＲＬは、実はほんとうに貴重なソース源だったんだ。そこが唯一の出発点。一体どうやって手に入れたんだか。
師匠は、どうして、これを僕に渡したのか。直後の師匠との不通、逮捕。そして検索結果の驚くべき恣意性。
その企業は何故、独自の言語を開発したのか。そして、どうしてそれを隠したがるのか。

僕らは、面白そうなものを探していた。とてつもなく、面白いものを。
僕は師匠が逮捕されてから、そしてそのことについてよく考えてから、あいつにこのことを話した。あくまでも推測の域にすぎなかった。
だけど、当然だけど、あいつはその話に乗った。目の色を変えて乗ってきた。たぶん話を持ってきた僕も目の色が変わっていた。
また、まただよ。興奮の波。ノルアドレナリンえんどるふぃん全開だよ。
僕はすーぱーハイパーモードでキーボードを叩いた。とにかく情報が欲しかった。情報。情報。情報。それが全てであり、とてつもない武器になるのだった。

だけど、なかなか見えなかった。師匠の教わった方法でも、ごく僅かだった。企業は世界的規模にコングロマリット化した超巨大企業だったけど、かんじんの独自開発言語なんてものは表面は全く存在しなかったし、その情報に関して洩れることすらなかった。
僕はイライラしていた。何も出ない。膨大な屑の情報を前にして、普通のやりかたではなにもでないと思った。だから僕は師匠に教えてもらったＵＲＬから、一番深いところに入ることにした。それはハイリスクであって、リターンが少しでも期待できるわけではなかった。
無理やりねじ込んだ。結果、一枚の画像ファイルだけ、手に入れる事ができた。そしてその代償に、師匠からもらった大切なＵＲＬが、無効になってしまった。
その画像は、ホワイトボードに描かれた記号類の群れだった。３０代くらいの白衣を着た男が、それらを指しながら何やら説明している。
「どうして白衣を着ているんだ？」

写真を見せた時、あいつは最初にそう言った。

それから、なにも進むことができず、お互いうっぷんが溜まっていたところへ、ガキが来、そして、息抜き程度に、この、真っ白な部屋へ来たんだ。

それが、

「まさか…」

「え、なに？二人ともこれ見たことあるの？」

僕たちは目を合わせた。こいつに、このガキに、どう説明しようか。

記号類（後書き）

おそくなってごめんなさい。

続き。（前書き）

続き。

続き。

ここまで来てしまってはもうどうしようもない。
僕とあいつは無言の内に会話をし、事の顛末をガキに話すことにした。
「へー・・・これが」
改めて見直すと、とても不思議な感覚に襲われる。時には緩やかな曲線を描き、時には厳かに意味を刻むこの美しい記号類は、なにかよからぬ事を書き綴ることが不可能であるように思われた。希望的観測ではあるけれど、もしかしたらこの企業はなにかとてつもなくいい事をしようとしているのかもしれな・・・なんて思いそうにもなったけど、逮捕された時の悲しそうな師匠を思いだすと、やっぱりそんなことはないと思い直した。
「でさ、どうすんの？」
そこが問題だ。謎は深まるばかりだ。まさか現実でこの言葉を思うとは予想だにしなかったよ。
「とりあえず画像としてこれは保存して、あとで解析する。こいつがこの言語表を持ってればいいんだが。」
「そしたらどうするの？」
「家の中に侵入する。」
当然じゃないかとでも言いたげにゴーグルをつけた顔を上にあげて見下すように言う。ほんと、いちいち。
まぁ、かっこいいからいいんだけどね。
ただ、こうなってしまっては、本当に、こうなってしまっては、おっさんの家に僕らが入るしかないだろう。なんの手掛かりもない今は。
この普通じゃないおっさんが、僕らの唯一の頼みの綱だ。
「今日はこれで撤収だな。」
時計を見るとあと2時間でおっさんが帰ってくる時間帯だった。そ

れ以来X線やγ線をいろいろと飛ばしてみたけれど具体的な情報は何も得られなった。
「でも、撤収って、このサソリくん、どうするの？」
「隠す。」
「ふぅん、え？」
「ガキはこれだからもう。だから隠すんだよ。あいつの行動から察するに、この部屋で、自分の部屋でさえ決まったパターンの動きしかしないんだよ。ロボットみたいにな。テレビの裏に隠しておけば、まず見つからない。そして俺達が侵入した時にサソリくんを回収する。」
「ねぇ、ねぇ、もし僕らがこの壁に書かれた文字を見つけなかったら、どうするつもりだったの？」
「隠しておく。」
「それで？」
「隠しておく。」
「そ・・それだけ？」
「まあ、そんなに早く見つからないだろ？」
なあ？と言って僕にゴーグルを向けてくるけれど残念ながら僕がガキの味方だ。冷めた目で返す。
「まあ、なにはともあれ、少しばかり進んだな。」
そう。本当にそうだ。
「あのおっさんの後をつけなくては」
僕は切実に言う。そして切実に思う。全てを搾り取ってやる。
「ああ、残念ながらあのおっさんからはありったけの情報を絞り取らせてもらおう。奴の個人情報も全て洗え。」
警察みたいな言い方。それにしぼるはそっちじゃない。
「じゃあ、僕はそろそろ帰るよ」
「おう。」
「んー」

ドアが閉まる。
「なぁ、」
あいつが僕を見る。
「しょうがないでしょう。本当に危険になった時はもうガキに面と向かってこれ以上はつれていけないと告げるしかないよ」
「だよなあ」
「もう手遅れかもしれないけど」
「だよなあ」
珍しく弱気な気がした。

「おやすみ」
「おやすみ」

今回の出来事で、大きく何かが揺らいだ。それは、一つは、冷静さかもしれなかった。

エンパイア

次の次の日、つまり月曜日、僕とあいつでおっさんを尾行する。
「なにかあったら僕に教えてね。リアルタイムでだからね」
ガキはそう釘を指して学校へ出かけていった。

電車に乗り約２０分後、おっさんは他の人間と同じように駅に降りた。
その光景に僕はとても不思議な感覚を覚えたんだ。逆転というか。正常ではないおっさんが正常な人達と何の区別もつかずに駅に降り立ったんじゃなく、おっさんはあくまでもこの光景通りにまわりと同じことをしているのかもしれないってね。まわりも、おっさんなのかもしれないってね。
そしたら僕たちもそうなんだろうか？隣に立つあいつも？

５分ほど歩き目的地に到着のご様子だ。なるほど、それは本社だった。首を曲げて曲げてやっと一番上が見れるほどの他と同じくらいの高さのビルだった。
ガラス張りのいかにもオフィス・ビルディングの大きな入口におっさんは入っていった。おっさんの背中から読み取るに、あまり会社に行きたくないように感じがした。

「どうする？」
おっさんがここに来るのはだいたい予想はついていたけれどね。
「後の尾行はここの社員にならない限り無理そうだね」
「じゃあなるしかないな。」

火曜日。もっと朝早くに僕たちは出かけて、本社ビルの右側面でじっと突っ立っている。スーツ姿のあいつは言うまでもなく似合って

いた。毎日画期的なイノベーションを起こしそうなだけどそれがめんどくさそうな社員みたいだった。でもそんな社員はいないから結局は違和感として僕の目に映った。
「あいつはどうだろう。」
あたりが少しずつ明るくなってきたころ、ようやく社員第一号が現れた。表情から読み取るに、あまり会社に行きたくないような感じがした。
すっと僕らは音もなく歩きだす。そして音もなく彼の両肩を固定し、音もなく右側面の道に引きずり込む。さるぐつわをし、手足をバンドではめ、磁気カードを取り出す。カードを見る限りどうやらそれなりの下っぱのようだった。
「おわり。」
植え込みのなかに隠す。
「次。」
次はその5分後だった。背の低い男だった。さっきと同じような顔だった。この会社はそんなに劣悪な環境なのだろうかとその時の僕はぼんやりと思った。
同じようにすっとやってすっと終わった。今日は寒かったからカイロを腹の上にじかに並べて置いた。でも後になって思うとあれじゃあ腹だけが死ぬほど熱くなっただけだったかもしれない。
淡々と進んでゆく。
８時２０分頃には多くの人が入口に吸い込まれていった。僕らもそれに紛れて入口に入る。
その瞬間から、相変わらずの僕は急に緊張しはじめた。心臓がきゅうっとなって、バイオリンのE線でもピアノ線でもいいけど、それがピンと張りつめられた感覚がした。と同時に、この状況に関する様々な情報が一気に僕に流れ込んでくる。
ここは日本でも、いや世界でもトップクラスの企業。僕はその入り口に立っている。そしておそらく日本で屈指のハイパー頭脳集団たちがなんともない顔で僕の傍を通りすぎている。一瞬だけ、いや一

瞬じゃないけど、そのビルに入っていた間だけど、僕はその社員になった錯覚を起こしていた。半分は意図的ではあったけれど。
僕はこんな場所に勤めているのか。誰もが羨む場所。勝ち組の象徴？人生の安定を保証するもの。
入口からの景色はとても、よかった。美しいとか綺麗とかではなく、気分をよくさせるなにかがあった。君達の将来は我々が保証するよとでも言いたげな、「受け入れる」ようなエントランスだった。
どうやらおっさんは遅めの出勤らしい。社員の波の第一波は、昨日おっさんが入社した時間よりも３０分ほど早かった。
ぼくらはその第一波に揉まれながら、すました顔でカードを当て磁気ゲートをくぐる。
残念ながら、ここのセキュリティに関しては、何の情報も得られなかった。それはとてつもないことなんだけど、だからこそ僕らはもう行き当たりばったりになるしかなかった。
「おい、あんまりじろじろ見ると不審がられるぞ。」
そう言いながら僕の肩を叩いて、ガラスのらせん階段の上にあるスターバックスを指さした。
「おっさんが出勤してくるのはもうちょっと先だからあそこで見張っていよう。」
すげー。すげー。階段を上る間僕はそれしか言わない。語彙の少ない僕にはそれしか言えない。
スターバックスにはＭａｃと向き合ってかたかたしている人や、ウォールストリートジャーナルを広げて読んでる人もいた。いかにもだった。僕も同じようにしていかにもになりたかった。僕はもう全部忘れて一生ここに座っていてもいいんじゃないかなとさえと思った。
しばらくすると、社員の波の第二波がやってきた。おっさんは相変わらず着こんでいて丸くなっていたので、すぐに見つけられた。
僕とあいつは静かに席を立ち、僕は最後に後ろを振り返って名残惜しそうに他の人たちを見てから、あとについていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4112w/

やあ、みんな。

2011年12月17日18時47分発行